

フェスティバルトキーョ実行委員会		
顧問	野村 萬 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師 福原義春 株式会社資生堂 名誉会長	
名誉実行委員長	高野之次 豊島区長	
実行委員長	森田 広 アサヒグループホールディングス株式会社 相談役	
副委員長	市村作知雄 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長 栗原 直 豊島区文化工部部長 東澤 昭 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長	
委員	岡田恭子 株式会社資生堂企業文化部長 尾崎元規 公益社団法人企業メナ協議会 理事長、花王株式会社 顧問 熊倉純子 東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授 小沼克年 アサヒビール株式会社社会環境部 部長 鈴木正美 東京商工会議所豊島支部 会長 扇田昭彦 演劇評論家 永井多恵子 公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター 会長 小澤弘一 豊島区文化工部文化デザイン課長 岸 正人 公益財団法人としま未来文化財団 部長 蓮池奈緒子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 小島寛大 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事	
監事	鈴木さよ子 豊島区総務部総務課長	
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)	

ディレクターズコミッティ	
代表	市村作知雄
副代表	小島寛大
メンバー	楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、長原理江、横堀広彦

フェスティバルトキーョ実行委員会事務局	
事務局チーフ	葦原円花
制作	小島寛大、楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、高橋マミ、十万垂紀子、松嶋瑞香、荒川真由子、横堀広彦、小山ひとみ、砂川史織、松宮俊文、守山真利恵、横井貴子
広報	楢江紗恵、湯川裕子
企画営業	長原理江
票券	渡邊絵里、穴戸 円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
事務局アシスタント	平田幸栄
経理	堤 久美子
総務	蓮池奈緒子、一色壽好、横川京子

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	加藤由紀子
照明コーディネーター	佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川 益(有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション&デザイン	河村康輔
メインビジュアル	二階謙ヲシ(SHOHEI×河村康輔)
ウェブсайт	濱田真一+番松 佑+菅原直也(株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
物販	渡辺 淳
執筆・当日パンフレット編集	鈴木理映子

アジアシリーズ・プログラミング	李 丞孝
シュリンゲンジープ特集 企画・コーディネート	ウルリケ・クラウトハイム

主催：フェスティバルトキーョ実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
アジアシリーズ共催：独立行政法人国際交流基金(国際交流基金 東アジア共同制作シリーズ vol.2)
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)、J-WAVE 81.3FM
特別協力：西武池袋本店、東京百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チヨコト株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファ池袋まちづくり、ホテルロボロリタン、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー

アーツカウンシル東京 フェスティバル助成(公益財団法人東京都歴史文化財団)
平成28年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ(池袋／としま／東京アーツプロジェクト 事業)
公益社団法人企業メナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド 採択事業
フェスティバルトキーョ14は東京クリエイティブワークスと広報連携しています。
会期：2014年11月1日(土)ー11月30日(日)

インター：阿部佑加、入江都美、岡崎由美子、加藤希美、加藤彩、神永真美、川村知也、北村未来、木田みのり、佐藤隆哉、清水千奈美、杉本真理江、高橋雅臣、田中秀樹、田中紗織、田中直子、遠山尚江、中村みなみ、葦原千亜紀、橋本萌、針谷慧、平石直輝、福地紗綾、三羊文乃、山下登枝子、山口祥輝、吉原早紀

ETワルーン：青柳佐代子、秋元エマ、阿久根夕佳、朝倉知世、浅川喜子、熱田明美、阿部敦子、荒井純宏、新井顕行、有本裕美子、安藤香里、五十嵐未来、井口真帆、井手上紗織、今川涼香、上野智美、榎悠里、大塚幸、大迎美希、大出晴、小川真理子、小山内梓希、小野寺ありす、畑田みずき、加藤千夏、片山悠太郎、桂屋穂子、加藤真帆、菅野沙和子、北原七海、児輪祐佳、小林惠理子、境田博之、佐川逢枝、崎津恵梨、篠彩夏、藤原沙織、島根悠子、霜島桜子、鈴木南、間島弥生、高橋志緒、高松章子、田中正雄、民谷絵美子、津田貴生、照沼裕香、渡辺航、富永愛香、中俣恵美、中川朋子、中村直樹、中村公子、中村光子、根本明美、波田野子乃、峰谷翔子、林ひかり、平野桃里、胡瀬、藤田紀子、富士原和代、又村実穂、三ツ木孝輔、松永愛子、宮川学、宮内隆生、森田結香、山口侑紀、四浦麻希、吉田美幸、四方田結子、跡見学園女子大学 曾田ゼミインシカワゼミ

					
豊島区 TOSHIMA CITY	公益財団法人 としま未来文化財団	ANJ NPO法人アートネットワーク・ジャパン Arts Network Japan			
JAPAN FOUNDATION 国際交流基金	Asahi アサヒ株式会社	SHI/EIDO	ARTS COUNCIL TOKYO		

発行：フェスティバルトキーョ実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 TEL:03-5961-5202 http://festival-tokyo.jp/
編集：鈴木理映子、フェスティバルトキーョ実行委員会 デザイン：小林 剛 (UNA) ※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Executive Committee	
Advisors: Man Nomura, Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh Actor Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City Chair of the Executive Committee: Hitoshi Ogita, Adviser to Board, Asahi Group Holdings, Ltd. Vice Chair of the Exeuctive Committee: Sachio Ichimura, Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ) Akira Kurihara, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City Akira Touzawa, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation	
Committee Members: Kyoko Okada, General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd. Motoki Ozaki, President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation Sumiko Kumakura, Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts Katsutoshi Konuma, General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd. Masami Suzuki, Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima Akihiko Sendā, Theatre Critic Taeko Nagai, Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO) Koichi Ozawa, Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation Naoko Hasuike, Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ) Hirotomo Kojima, Board Member, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)	
Supervisor: Sayoko Suzuki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)	

Directors Committee	
Representative: Sachio Ichimura Deputy Representative: Hirotomo Kojima Members: Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori	

Executive Committee Office	
Administrative Manager: Madoka Ashihara Production Co-ordinators: Hirotomo Kojima, Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Mami Takahashi, Akiko Juman, Luna Matsushima, Mayuko Arakawa, Masahiko Yokobori, Hitomi Oyama, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Marie Moriyama, Takako Yokoi	
Public Relations: Sae Horie, Yuko Yokawa Sales & Planning: Rie Nagahara Ticket Administration: Eri Watanabe, Tsubura Shishido Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato Office Assistant: Saki Hirata Accounting: Kumiko Tsutsumi Administrators: Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki, Kyoko Yokokawa	

Technical Director: Eiji Torakawa	
Assistant Technical Director: Yukiko Kato Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.) Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.) Art Direction & Design: Kosuke Kawamura Main Graphic Design: Satoshi Nikaicho (SHOHEI x Kosuke Kawamura) Website: Shinichi Hamada + Yu Shigematsu + Naoya Sugawara (loftwork Inc.) Overseas Public Relations, Translation: William Andrews Merchandise: Jun Watanabe Writing, Performance Leaflet Editing: Rieko Suzuki	

Asia Series Programming: Seunghyo Lee	
Schlingensief Film Series Programming: Ulrike Krautheim	

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)	
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)	
Asia Series co-produced by the Japan Foundation (The Japan Foundation East Asian Collaboration Vol.2)	
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd. Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), J-WAVE 81.3FM	
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chaocott Co., Ltd. In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association	
PR Support: Poster Hari's Company Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)	
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2014 (Ikebukuro/Toshima/Tokyo Arts Project Enterprises) Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture) Publicity Partner: Tokyo Creative Weeks	

Period: November 1 (Sat) to November 30 (Sun), 2014	
---	--

動物紳士

森川弘和 (振付・出演) × 杉山 至 (美術・衣裳デザイン)

Mr. Creature

Hirokazu Morikawa (Choreography, Cast) +

Itaru Sugiyama (Stage Design, Costumes) [Japan]



© Takaki Sudo

森川弘和×杉山至 モノとヒトとの 実験室より



—今回は森川さんが杉山さんとの創作を希望されたそうですね。理由を伺えますか。

森川 勤です(笑)。もともと違うジャンルの方、それも舞台に立つ人ではない方と一緒にやりたいと思っていたんです。また、物と直接絡みたいという気持ちもあって、「じゃあ物を作ってくれる人は誰だろう？ あっ、至さんだ!」という感じですね。—どこからその勤が働いたと思いますか。

森川 カンパニーデラシネラやダンスシアター・ルーデンスに参加した時に、実際に至さんの美術に触れたからではないかと思います。いろんなところに仕掛けがあって、毎回どんなものになるのか楽しみでした。でも、「こんな穴を発見したからくぐってみよう」なんて思っても、やはり演出家の方がいるので自分のやりたいように試せる機会がなかったんです。空き時間にこっそり遊ぶくらいで(笑)。だから今回、至さんのことがバツと浮かんだんだと思います。

—そのお話を、杉山さんはどう受けとめたのでしょうか。

杉山 森川さんは身体の使い方、物との関わり方がすごく面白いので、この人に何か仕掛けてみたいという意識は持っていたんです。だから悩むことなく、やってみたいなと思いました。僕は人間の身体が周囲の環境にどうアフォードされるかに興味があるので、少し歩きづらいつころや、上がりにくい段差など、役者やダンサーに負荷をかけるものを作ってしまうんですね。でも森川さんはそれをありえない動きでクリアしていくんです。いまだに覚えているのがデラシネラの『異邦人』(10・13年)。

森川さんと菅(彩夏)さんがテーブル一つを使って、出会いから別れまでを2分くらいで表現していたんです。その踊りが本当に秀逸で、物一つと身体でこれだけの表現ができるんだと驚きましたね。

—森川さんは、白いA4のコピー用紙を美術や小道具に使用した『A4(エーヨン)』シリーズでは、まず美術ありきで、そこから動きを作っていましたよね。今回も同じように、美術について話し合うところからスタートしたのでしょうか。

森川 正直に言うと、まずは至さんからアイデアを出してほしかったんです。でも僕からお声掛けしたこともあり、それを言い出せなくて、半分嘘のアイデアを書きました(笑)。で、実際お会いした時に「僕、アイデアゼロなんです」とお伝えして。

杉山 コンセプトありきではない作り方は面白いなと。やりたいことを言ってみてくださいというお話だったので、いつか使ってみたいと思っていた、伸縮性のある白い生地を最初に持っていきました。それを森川さんがいじっているうちにわかってきたのが、この素材が実はハイブリッドだということ。普通、レオタードなどに使う伸びる生地というのは—2wayと言うんですけど—、伸びる糸だけで編んでいるんですね。でもこの白い生地には、ゴムと、ある一定以上は伸びない包帯のようなガーズ生地が織り込まれていて、ちょっと異質なんです。そのハイブリッド感、キメラな感じを発見したのは大きかったですね。その後、イスとハシゴという関わりのない二つを組み合わせたものを作ることもありました。タイトルの“動物紳士”もそういうことなんですよ。

森川 今回は身体にクローズアップしたいという思いがあって、動物って付けたかったんです。それと他の言葉をどう組み合わせるかを考えていた時に、最終的に舞台上に残るのは僕なんだと。動物みたいな身体、考えるのではなく感覚で動く身体、シュツとした身体……、人なのか動物なのか、よくわからない生き物が舞台上にいるんだと想像して、“動物紳士”に決めました。

舞台は自然科学の実験室

—杉山さんは、ソロ公演に携わるのは初めてですよ。通常のカンパニー公演に参加する時と、スタンスの違いはありますか。

杉山 やはり今回は演出家がないことが大きいですよね。もちろん森川さんが振付をするんですけど、コンセプトがないところからスタートしているので。だからいかに“決めないことを楽しむか”というスタンスでいます。始まりの地点、つまりゼロポイントを決めれば、二人ともノウハウがあるから、その経験の中で収めていくと思うんです。でも今回はそれを取っ払っているんで、いまだにどうなるかわからない。今見えている方向性も、ひっくり返る可能性はまだ十分あります(笑)。

—演出家がないという、客観的な視点がない場合、身体の動きは何を指針に作っていくのでしょうか。

森川 客観的な視点で作品全体をどうしようか考え出すと、僕だけの作品になってしまう。今回は全員で探りながら作り上げていく作品なので、僕のやるべきことは、どんな動きをしたいのか、どんな動きを面白いと感じるのかを一生懸命見つけることだなど。そうして出来上がったものを積み重ねていくしかないですね。それをうまくまとめようとしても、無理が生じてしまうと思うし。だからギリギリまで漂っていようと考えています。内心焦ってますけど(笑)。

—実際に、伸縮する生地やイスとハシゴを組み合わせたものと、身体を関わらせてみた感触はいかがですか。

森川 (イスとハシゴの物体を指して)この人とは仲良くなりました(笑)。

杉山 生地とも相当仲良いですよ。

森川 そうですね。でも「イスハシゴ」に関して、初めて見た時は結構大きいなと思ったんです。どう扱えばいいのかとか、運ぶの大変だなとか、文句ばかり言ってた(笑)。でもそれじゃダメだなと思って、とりえず毎日いろんなところに座ってみよう。そのうち持ってみたい、運んでみたいするようになり、徐々に仲良くなっていきました。重さに慣れてくると、こんな立て方ができるんだとか、いろいろな発見もあって。

杉山 僕は振り子が好きなんです。位置エネルギーから運動エネルギーに変わって、スピードが最速になった時に一番低い位置にいる。ということは、止まっている時にエネルギーが保存されているんだろうとか、物理的なことが目に見えてわかるので。それと同じようなことを森川さんの身体と動きから感じるんです。エネルギーの変化が身体からにじみ出るというか。だからイスとハシゴとか、ハイテクじゃない物と関わることで、森川さんにどういった新たな変化が生まれるのかを見るのは、自然科学の実験室のようだ。

森川 確かに、僕の身体で物をどんなふうに扱えるかというのは実験と言えますよね。今は、身体のパーツが拡大して見えるシート状のレンズを何枚も張り巡らせたパネルを、どう使用したら面白いのか、試行錯誤中です。

—これから追加される美術もあるんですか。

杉山 そうですね。もうひとつアイデアとしてあるのは、傾斜した床です。森川さんの動きは床との関係性が強いので、じゃあ傾いていたらどうなるんだろうと、単純に見てみたかったです(笑)。

森川 自分がどうなるのか、全然想像つきません……。いつできるんですか？

杉山 あと1週間以上かかります。遅いほうが“決まらない”ですよ(笑)。

森川 いやいや、仲良くなる時間が必要なんですよ！

—今回、杉山さんは衣裳デザインを初めて手掛けられたそうですね。

杉山 これは本当に無茶ぶりです(笑)。イメージに対してはうるさいですけど、衣裳のセンスはまったくくないですから。ただ、衣裳も装置の一部だと思っていて、それが身体とどう関わるのかは興味

どこまでもはてしなく とことんまであそべるか

乗越たかお(作家・ヤサぐれ舞踊評論家)



がありました。

森川 まず杉山さんから、背中を見たいとお話があったんです。

杉山 ともかく裸にしたいのと(笑)、美術に使う白い生地が、衣裳にも使えるなどと思って。あとはジャージですね。稽古などで着用している姿をそのまま観客に見せることで、日常での身体のあり方が、実は舞台と地続きだということを伝えたい。森川さんからもアイデアを出していただきましたよね？

森川 紳士のようにシュツとしたいなどと思っていて、じゃあタキシードかなど。それはボンディングというウエットスーツのような生地で作ります。

—先日、現在できている動きやシーンを、スタッフの方に見せたとか。

森川 まだ構成はできていないので、各シーンをバラバラに見せた感じですね。

杉山 現時点で相当面白かったです。これから新たに何かを足すというよりは、今できているものをさらに深めたり、緻密にすることで全然いけるなど。僕もまだできること、やりたいことを探っていきますし、あとは音が入ってきて、どうつなげるかですね。

森川 衣裳に関しても、最初はジャージでやろうと思っていたシーンを、タキシードを着て動いてみたら、全然印象が違ったみたいで。

杉山 ものすごく変わったよ。“動物紳士”が出てきた！って思った(笑)。実験室のような感じもした

しね。だから一つひとつの実験がそれぞれで完結するのではなく、つながって発展していくような作品になればいいなと思っています。

森川 そうですね。公演期間も長いですし、ソロなので、本番に入ってから思いついたことを取り入れたり、少しずつ変化させていけるかもしれない。日々実験です。

(取材・文＝巽大介 撮影＝長谷川敬介)



もりかわ・ひろかず
22歳で渡仏しマイムとサーカスを学ぶ。帰国後、京都を拠点に活動するMonochrome Circusのダンサーとして5年間活躍。2007年よりフリーランスとなる。自身の作品を発表するほか、カンパニー・テラシネラ、Dance Theatre LUDENS、Ted Stoffer、じゅんじゅん SCIENCE、dumb typeなどに参加。好奇心と探究心をもって身体に向き合い、その可能性を楽しみ、突き詰める。瞬発力と抜群のボディバランスを生かした動き、ドライかつ動物的な感覚をもつパフォーマンスは、高い評価を得ている。



すぎやま・いたる
国際基督教大学卒。在学中より劇団「青年団」に参加。2001年度文化庁芸術家在外研修員としてイタリア・ナポリの舞台美術工房にて研修。2006年、地点「るつぼ」にてカイロ国際実験演劇祭ベスト・セノグラフィ賞受賞。近年は青年団、双数姉妹、ボカリン記憶舎、地点、サンプル、山田せつ子、Dance Theatre LUDENSなどの舞台美術を担当。また舞台美術ワークショップを多数実施している。2014年、第21回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞を受賞。

森川弘和の経歴はけっこう面白い。

大学三年生のときフランスを旅行中、「もっとフランスにいたい！」という気持ちが止みがたく、カネはないしフランス語もろくに話せない…… そうだ！ マイム学校へ行こう！（しゃべらなくていいし）でマイム学校へ。しかしそこでマイムとサーカスの楽しさに目覚め、一所懸命に勉強して3年半をフランスで過ごす。

日本に帰ってからは、たまたま受けた京都のモノクローム・サーカス(主宰・坂本公成)のワークショップに惹かれ、活動に参加する。モノクローム・サーカスは名前に「サーカス」と入ってはいるが、サーカス集団ではない。かなり様々な要素を取りこんだ作品をつくるものの、ダンスカンパニーである。森川はここで5年間活動した後、フリーになった。

つまり森川はダンスプロパーではないのだ。モノクローム・サーカスとの出会いが、森川にとってダンスの初体験だというから、始めたのも遅い。だからなのか、あるいは元からの森川の性格なのか、ダンスの技術を披露するような押しつけがましさがない。激しく動いているときですら、絶えず自分の身体を眺めているような、不思議な静けさが舞台の根底に流れているのである。

筆者はかねがね「これからのコンテンポラリー・ダンスの鉱脈のひとつはサーカスだ」と言ってきた。それも超絶アクロバットのビックリ人間モノではない。とくに美術偏重で身体性が希薄になってきている中央ヨーロッパのコンテンポラリー・ダンスに対して、高い美術的なセンスはそのままに、強い身体性を屹立させた舞台を次々に生み出しているのがサーカス出身の連中だからだ。

日本でもかつては「アイデア発のヘタうま芸

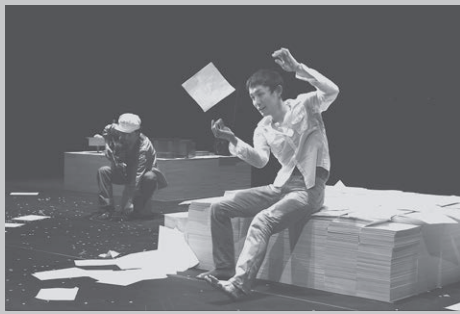
みたいなダンスが流行ったことがあったが、やはり淘汰されていった。とくに震災後はしっかりした身体存在感を演者も観客も求めるようになってきているのである。

彼らは高い身体性をアクロバティックな方面ではなく、表現の深化へと使う。まだ呼称は定まてはいないが「アート・サーカス」「ヌーヴォー・シルク(新しいサーカス)」などと言われている。ただこれは、出るべくして出たともいえる。とくにフランスは国立のサーカス学校設立当時から、コンテンポラリー・ダンスの振付家を講師に迎え入れており、「表現芸術としてのサーカス」を早くから志向していたのである。そういう意味では、フランスで学んだ森川にとってはサーカスやマイムとダンスは同一線上のものと思えられたのではないだろうか。

日本でもマイムをベースにしつつコンテンポラリー・ダンス的な作品を作る人はいて、活動停止中の「水と油」、そこから出た「カンパニー・テラシネラ」や「じゅんじゅん SCIENCE」(このふたつに森川は出演経験がある)、やはりフランスでマイムとダンスを学んだいいむろなおき、最近ではCAVAなどもいる。ただ森川は彼らと比べると、よりダンス的なスタイルである。

舞台上の姿から受ける印象だけでいうと、森川はオレのように腹の黒い人間にとって、ときに眩しすぎるくらい「いい人」「素直」に見える。むしろ舞台上では計算も打算もあるに決まっているものの、動きの端々から、坦懐に遊ぶ子どもを見るような気持ちになってくるのだ。まあいい大人が「子ども」とか「少年」とか言い出したらウサンくさいものなのだが、森川はどうにも無心に見えてしまうのだからしょうがない。

たとえばミュージシャンの青柳拓次とコラボレー



『AAAA』(2010年) 青柳拓次(左)と森川 ©Ryohei Tomita

ションした『Re:AAAA』(2011)は、大量のA4の紙を積んだ上やその周辺で森川は踊る。というか動く。ありていにいえば遊んでいる舞台だった。

長い手足の動きはなめらかで、体幹も柔軟に使用しながら徐々に繰り出してくる動きは創意に満ちており、ダンサーとしての技量の高さは明かである。しかし先述した通り、それは「強い主張を作り込んだ動きと構成で見せる」というものとはまるで違うのだ。紙を空中で手に貼りつくようにして振り回したりする。紙ひとつ、身体ひとつで際限なく遊び続ける。かといって観客を無視しているわけでもない。ただそこに居る姿、遊んでいる姿からどうにも目が離せなくされる魅力に満ちているのである。

ミュージシャンの青柳拓次はギターを鳴らして歌いながら、時に歩き回って森川と触れあう。感心するのは森川が、音と同時に静けささえもじつにうまく使うことだ。森川が音とからむことで、かえって静けさが際立つ瞬間が幾度もある。そうした音や光や空間との接し方が、支配的ではなく、楽しい遊び相手と絡むようなのである。

今回の『動物紳士』とは変わったタイトルだ。

ストレートに考えれば「動物(野生)」と「紳士(文化・文明)」の出会い、ということになるのだろうか。舞台上で起こることは全て文化であるともいえるし、人の身体は街に残された最後の自然ともいえる。プレスリリースには「とことん遊べ!」とあるが、まさに歴史学者のホイジンガーは人間を『ホモ・ルーデンス(遊ぶ人)』と呼んだ。つまり「遊び」こそ、「動物」と人間を隔てる基準のひとつなのである。

今回は青年団の舞台美術家である杉山至とのコラボレーションだが、杉山は山田せつ子やルーデンス等、ダンス作品とのコラボレーションも多い。事前のインタビューで森川は「基本的にはノープラン」だという。森川は杉山が提示する様々なアイデアを「身体に制約や負荷をかけるツール」としてとらえ、立ち向かいながら可能性を見出していくのだそうだ。さまざまな負荷、ルールなどの「縛り」のなかでこそ「遊び」は成立するものだが、それは「森川自身が自分の身体で遊ぶ」ということか、「杉山の美術と森川の身体遊び」ということかはわからない。そしてあるいは、さきほど「隔てる」といった「遊び」こそが、「動物と人間をつなぐ存在」なのかもしれない。いずれにしろどんな「遊び」が展開されるのか、楽しみに待ちたい。

振付・出演: 森川弘和
美術・衣裳デザイン: 杉山 至
照明: 榎美香(有限会社アイス)
音響: 齋藤 学
衣裳制作: 田島由深
振付助手: 山崎 朋
舞台監督: 鈴木康郎、湯山千景

記録写真: 青木 司
記録映像: 株式会社彩高堂「西池袋映像」

制作: 高橋マミ
フロント運営: 狩野正仁
インターン: 加藤 彩、萩原千亜紀

製作・主催: フェスティバルトーキョー

Choreography, Cast: Hirokazu Morikawa
Stage Design, Costumes: Itaru Sugiyama
Lighting: Mika Sakaki
Sound: Manabu Saito
Costume Production: Yoshimi Tajima
Assistant Choreography: Tomo Yamazaki
Stage Managers: Koro Suzuki, Chikage Yuyama

Photography: Tsukasa Aoki
Video Documentation: SAIKOU DO Co., Ltd.

Production Co-ordination: Mami Takahashi
Front of House: Masahito Karino
Interns: Aya Kato, Chiaki Hagiwara

Produced and presented by Festival/Tokyo